路地裏の酒場

貴方って詩人なのね、と愛らしい少女はささやく
瞳は酒の涙に潤い、うっとりと「詩人」殿を見つめ

うっとりと己(おの)が身体に満ちる快楽を見つめ

その胸の中(うち)に、さらにもう一雫(しずく)の

ただ一雫の黄金の水をたらして
その胸の中に拡がるを見つめようと
もう一度
もう一度、赤い唇を開く

貴方って、詩人なのね

それを耳にした「詩人」は
手にしていたグラスの中の酒を揺らし
くくく、くくく、と笑い出し
ついに哄笑を爆発させ
グラスを拭っているバーテンしか居ない酒場の
あらゆるグラスをカタカタ振動させる

哀れな小鳥は
悪魔の吼声の如き哄笑に、ぶるぶると震え
悪魔がなおも高く吼えると
自分のハンドバッグとコートを小脇に
カラスのような鳴き声をあげて店を出る

悪魔はなおも哄笑していたが
ふと、グラスを黙々と拭いては並べている
バーテンの静かな姿に目を細め
次第に笑いを小さくしてゆく
次第に酒場を静かにしてゆく
次第に酒場は静かになってゆく
次第に静かになってゆく
次第に・・・
次第に・・・
次第に詩人の声は
しゃくりあげるようなすすり泣きに———

そしてやがてそれも

薄暗い酒場の中(うち)に吸い込まれてゆく

次第に静かになってゆく
バーテンは黙々とグラスを拭う
バーテンは黙々と拭う

(1982.1.16)